

旧新島裏墓碑の修復・強化と保存

鈴木重治

はじめに

一、修復完了を目前にして

二、保存に向けての課題

むすびにかえて

はじめに

一九八六年六月に破損した旧新島裏之墓碑は、考古学研究室及び校地学術調査委員会などの協力によって、一九八七年九月に修復を完了する。今後は、保存について適切な対応が求められることになる。

本誌の八十一号、八十二号の二度にわたって破損墓碑の修復にかかわった経過を報告

したが、ここでは修復の概要と現時点までの全体の経過及び保存上の課題にしばって報告する。

一、修復完了を目前にして

旧新島裏墓碑の修復が、ようやく終わろうとしている。本誌が刊行されるまでには、同志社の田辺校地の考古学第一資料室で修復後の観察が開始されていることであろう。いわば修復後のアフター・ケアの期間に入ることになる。つまり、作業に大きな変動がなければ、大学の後期の講義が開始される頃には、大きく破損して見る影もなかった旧新島裏墓

碑が、旧状に近い親しみのある姿で我々の前に登場する。

想えば、昨年の梅雨時に、新町校舎の旧考古学実習室へ若王子山頂から破損墓碑が搬入されて以来、ただちに始められた修復の為の基礎的な作業や、保存科学上のさまざまな問題点の検討に入ってから、早くも一ヶ年が過ぎたことになる。修復に予想以上の時間を要したことは、修復を担当した校地学術調査委



破損した新島裏墓碑の一部

員会の協議の席上でも指摘されたように、想像以上に破損部分の物質的な劣化が進行していたことにもよって、修復に当たっての綿密な計画と樹脂の減圧含浸をはじめとする復元工程上のいくつかの作業が、学内の設備ではクリアーできないため、樹脂注入などに実績をもつ元興寺文化財研究所の機器使用とその調整期間に時間を要したこともよっている。この間、同志社大学の考古学研究室と元興寺文化財研究所による度重なる検討会がも



修復作業

たれたことで、

- 一、破損部の実測図作成
- 二、使用樹脂の選定
- 三、減圧含浸の具体的方法の点検
- 四、復元組み上げ時のシャフトの確認
- 五、接合、補填、整形材料のテスト
- 六、仮組み上げ後の観察
- 七、古色仕上げの顔料の検討

などの技術上の問題点の確認に加え、修復上の理念として、歴史的・精神的な財としての墓碑を、国宝・重要文化財に準ずるものと評価した上で対応することができたことは、きわめてよろこばしいことであった。同志社にとってかけがえのない新島襄の墓碑だけに、繰り返しての慎重な検討は当然のことであった。

修復を前に、もっとも恐れたことは、大小さまざまな形態に破損した墓碑の石材が、表面的にも大変にもろい状態にあったことから、樹脂注入後の接合過程で、個々の接着面の確認がはたしてできるのかという点であった。数多くの石塊や、小礫片などに姿を変え、墓碑の銘文の一部が失なわれていたり、損壊によって新たに生じた生々しい割れ面が



修復作業

あまりにも強烈であったからである。観察すればするほど接合の困難さは、出土の土器や埴輪などの復元以上のものであり、とりわけ破損礫面の粒子の凹凸が多様なための条件の悪さ、加えていまにも落剥しそうな部分が石材の節理方向に沿って相当数存在したことが破損後の実測図作成中にも確認されていただけに、樹脂の減圧含浸の過程でも心配されたことであった。

そのような中で、繰り返えされたテストのデータによって採用した樹脂の選択の適切さが効を奏して作業が順調に進んだことは、まさに天我れに味方せりの感であった。つまり、アクリル系熱可塑性樹脂の PARALOID の採用である。その使用は、きわめて効果的

であった。この間、同志社の要請に応えられて、修復に当たっての重要な過程で、好意的に協力された元興寺文化財研究所の関係者には頭の下るものがあった。心から感謝の意を表するものである。

二、保存に向けての課題

文化財の保存修理に当って、もっとも効力のある素材は漆だとする見解がある。もとより文化財それ自体の材質にもよるわけだが、漆を含めた樹脂の検討、とりわけ接着材としての合成樹脂の開発にはめざましいものがある。エポキシ系樹脂やシアノアクリレート系樹脂の普及もよく知られている。

これらの合成樹脂の属性として、耐久性や安定性、更に強度が高まる点で、すぐれた長所がある反面、欠点として紫外線に当たるとチヨキング(粉化)や黄変化、ときに褐色化するというデータが知られている。つまり合成樹脂の欠点を理解すると、修復後の保存環境の整備が条件的に満たされることで、合成樹脂使用の効果が発揮されることになる。単的に指摘すれば、直射日光を当てないことで

あり、紫外線をカットする対策が肝要となる。したがって、室内又は、覆屋の中に適切な配置で納められることが、保存上の大前提となる。時には、紫外線カットの特殊ガラスが通常のガラスに紫外線カットの樹脂を塗るなどして、紫外線を吸収する工夫が必要となる。いずれにしても保存環境を整えることが文化財保存上の課題である。

新島襄墓碑の修復については、倒壊直前までの古色を帯びたエレガントな色調を目標とした古色仕上げを努力したわけであり、修復後も長期間にわたって維持し得るような顔料とアクリル絵具、つまりブチラル樹脂が使用されている。したがって、紫外線から守られる必要があるわけで、更に雨水による変化



修復完了目前の墓碑

と、湿度や温度差など環境についての配慮が保存上の課題となることは当然である。

以上の保存上の課題に加えて、もっとも重要なことは、墓碑の保存と新島精神の復活を願うことの全学的な取り組みであり、かつての筆子塚を参考にすれば、再現する『旧新島襄之墓』を精神的な財として、記念碑以上の願望をこめて保存することこそが求められているようにおもえるのである。ここに大きな保存上の課題がある。

むすびにかえて

新島襄之墓碑の損壊は、あまりにも大きな悲しみであった。しかし悲しみに打ちしがれてばかりはいられない。すでに墓碑は保存科学の理念と方法によって我々の前に再現している。修復と保存に当っては、万全の対策が講じられたし、これからも講じられるに違いない。新島精神の復活が求められるのなら、墓碑の保存を一つの契機に、さらなる「同志社」創造へ向けての反省の原点であり度い願う。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)

同志社国際中学校

設置開校にあたって

山 本 通 夫

帰国子女の受け入れを主たる目的とする高等学校として、同志社国際高等学校が設置され、開校したのは、昭和五年四月一日でした。一三二名の新入生を中心に、ご父兄、および、学内・学外の関係者の方々をお迎えして挙行了開校式の、あの日のことは、いまも、きのうのことのようにありありと思ひ出されます。

月日のたつのは早いもので、あれから、もう八年が経過したのです。

「帰国子女の教育」、それはまったくはじめ

てのことばかりでした。まさに、「未知との遭遇」そのものでした。いろいろな、新しい「事実」にも出会いました。それらのひとつひとつに手さぐりで立ち向かい、なんとか乗り越え、克服して、ここまでやってくることができました。労多し、たいへんな道でした。しかし、それが、自分たちが創ってゆく教育、自分たちで創ってゆける教育でしたから、そこには自由があり、楽しさがあり、夢がありました。みんなで、新しい学校づくりに励んできたのです。

そうした八年の歳月の間に、一七九八名

(帰国子女一四四名・国内子女六五一名・留學子女三名。生徒定員は、開校当初は一年二〇〇名でしたが、五年目に入る昭和五九年四月から、現在の二七〇名に変更しました。帰国生徒が $\frac{2}{3}$ 、国内生徒 $\frac{1}{3}$ の構成になっています)の子女たちが新入生として入学してきました。そして、そのうちの九七七名が、それぞれの三ヶ年間の勉学のときをじゅうぶんに修め、成果をあげて卒業してゆきました。卒業生たちがみずから希望し、選択していった進路は、次頁図表のとおりです。

大多数が、同志社学内大学への一貫教育の道を選び、進学してゆきました。そして、第一期卒業の五五年度生は、今春三月、すでに大学を卒業し、実社会へと巣立ってゆきました。

同志社国際高等学校は、このように、帰国子女受け入れ専門の高等学校として、その責務を今日まで、多少ながらも果してやることのできたのですが、ほんとうに、帰国子女とともに歩む教育をまちがいなく担ってゆくためには、さらに、もう一段高く、拡がりのある学校へと大飛躍してゆかなければなりません。

	同志社学内大学推薦入学進学						同志社学外大学 その他進学		卒業 総数
	同志社大学		同志社女子大学						
	帰国	国内	帰国	国内	帰国	国内	帰国	国内	
55年度生	58 41.1%	54 38.3%	6 4.2%	0	64 45.4%	54 38.3%	14 9.9%	9 6.4%	141
56年度生	86 45.7%	53 28.1%	14 7.4%	4 2.3%	100 53.2%	57 30.3%	24 12.8%	7 3.7%	188
57年度生	85 48.6%	60 34.3%	8 4.6%	0	93 53.1%	60 34.4%	20 11.4%	2 1.1%	175
58年度生	106 51.0%	59 28.3%	13 6.3%	1 0.4%	119 57.0%	60 29.0%	25 12.1%	4 1.9%	208
59年度生	104 39.3%	108 40.7%	20 7.6%	6 2.2%	124 46.8%	114 43.0%	15 5.6%	12 4.5%	265

近年、日本の経済・学術・文化などの国際的諸活動は、いちじるしく発達してゆく傾向にあります。こうした動きにもなつて、海外各地で活躍する日本人の数も急増し、これらに留邦人に同伴して海外に在住する子女の数もまた、年々、増加していつています。

外務省が、昭和六二年五月一日付けで行った調査の結果報告では、学齢期にある在留邦人子女の数は、四一、一五五名で、前年度調査時の数を、一、七六二名（四・五四％）越えているとされています。

これらに留邦人子女は、教育事情や、文化的・社会的風土の異なる海外各地に、短いものでも二年、長期にわたるものでは、七年、八年、一〇年を越える歳月在住したのち、帰国子女として帰国してきます。

文部省の調査では、昭和六一年四月から、昭和六二年三月までの一年間に、海外各地から、一〇、四五九名の子女が帰国してきていると報告されています。そして、これら子女のなかでも、義務教育学齢期にある子女の数が、八、九六三名で、児童数六、四七一名（内、六年生一、一〇五名）、生徒数は、二、

五三四名（一年生九〇一名、二年生八二三名、三年生八一〇名）であることが明らかにされています。

このような帰国子女の大部分は、国・公立の小学校・中学校へ転入学してゆきます。義務教育学齢期にある帰国子女の受け入れを、国・公立の小学校・中学校では、義務づけられているからです。しかし、それら帰国子女を受け入れた諸学校のすべてが、必ずしも、帰国子女にとってじゅうぶんに整備された教育環境ばかりとはいえません。なかには、適正でないとと思われるものもあります。

帰国子女には、日本語がじゅうぶんにできないとか、日本国内のことについてあまり詳しく知っていないとか、すべてのことで水準からずれている、遅れているとかの、日本国内の、現在の学校教育・学校教育体制に、直ちにびつたりとはまりこむことができずらいこと・ところが、確かにあります。そして、《いじめ》、学業不振、登校拒否、就学不能など、その他の不適応をひきおこしているケースも少なくはありません。

しかし、帰国子女には、その在住した国々や、各地で、理解を深め、身につけることが

できたもろもろのもの・こと、いいかえますと、日本国内で生活していたのでは、身につけることができなかった。異文化体験に基づく、帰国子女だけがもっている特性^①というものがあります。この貴重な「特性」をゆがめることなく、じゅうぶんに維持、伸長させながら、また一方、日本国内で生活してゆくの身につけていなければならないのもろもろのもの・ことを身につけることができ、日本国内の学校教育・学校教育体制のなかに、まちがうことなくはまりこんでゆけるよう導いてゆく教育を行う学校が、帰国子女にとって必要なのではないでしょう。か。帰国子女をむりやりに、日本国内の学校・教育体制の枠のなかにはめこんでしまおうとする学校もあります。完全に「受験体制」のなかに組み込んでしまおうとする学校すらあるのです。そしてそれが、まちがいのない帰国子女のための適応教育だとされてさえているのです。そこでは、帰国子女の「特性」は、「遅れ」であり、「欠落」であり、「不適格」だとされるのです。「国際化のための金の卵」ともいえる帰国子女を、生かし、育て、養ってゆくことにはならないのです。

帰国子女についてのまちがいのない理解があつて、はじめてほんとうの帰国子女の教育があるのではないでしょう。か。日本流の教育によつて、日本国内の諸学校のなかで、帰国子女がただしく評価されることもなく、適正ではない教育をされ、そのことによつて、痛めつけられ、傷つけられ、苦しんでいるのを見るのは、つらく、悲しいことです。

帰国子女の教育には、帰国子女が、余分な負担を感じることなく、長期的な展望に立つて、帰国子女としてのそれぞれの「特性」を生かし、伸長させながら、ゆったり、のびのびと、しかも、確実に、学校生活を過してゆける教育環境が、絶対に必要です。たしかに教育理念に基づく、中学校・高等学校・さらには、大学へと連なり、発展してゆく「一貫教育」による学校の設置・開校を急がなければならぬ理由は、そこにあるのです。「同志社国際高等学校」としての八年の歩みが、その体験が、このことを教えてくれているのです。

精神とし、中学校・高等学校・大学を通しての一貫教育によつて行つてきました。知・徳・体の調和のとれた人間性の発達を願つての教育は、この一貫教育によつてのみ、可能だからです。

同志社国際高等学校は、当初、中学校・高等学校六年の一貫教育による帰国子女受け入れ専門の学校として発足すべく立案され、計画が推進されていきました。が、しかし、諸般の事由から、やむなく、三年の高等学校のみで開校し、今日まで、その歩みをつづけてきました。

開校九年目に入る昭和六三年四月、いよいよ、その本来の教育を確実に行つてゆくために、「同志社国際中学校・高等学校」として生まれかわり、同志社の一貫教育による帰国子女教育体制・教育環境づくりへの努力を、あらためて、着実に始めてゆくこうとしているのです。

いま推進されつつある「同志社国際中学校設置計画」のあらましは、つぎの通りです。

◎名 称 同志社国際中学校

◎生徒定員 一学年 九〇名

同志社の教育は、創立以来、キリスト教主義に基づく全人教育、国際主義教育を建学の

教育課程表

() 内は選択

科 目		1 年 生	2 年 生	3 年 生	計
聖 書	必修	1	1	1	3
	選択	5	5	5	15
国 語	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択	4	4	4	12
日 本	必修	4	5	5	14
	選択	4	4	4	12
社 会	必修	1	1	1	3
	選択	(2)	(2)	(2)	(6)
数 学	必修	1	1	1	3
	選択	(2)	(2)	(2)	(6)
理 学	必修	3	3	3	9
	選択	2	1	1	4
音 楽	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択	6	6	6	18
美 術	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択	(2)	(2)	(2)	(6)
保 健 体 育	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択	(2)	(2)	(2)	(6)
技 術 家 庭	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択	(2)	(2)	(2)	(6)
英 語	必修	1	1	1	3
	選択	32	32	32	96
ド イ ツ 語	必修	(2)	(2)	(2)	(6)
	選択				
フ ラ ン ス 語	必修				
	選択				
ス ペ イ ン 語	必修				
	選択				
H R ク ラ ブ	必修				
	選択				
合 計					

◎生徒構成

◎教育体制

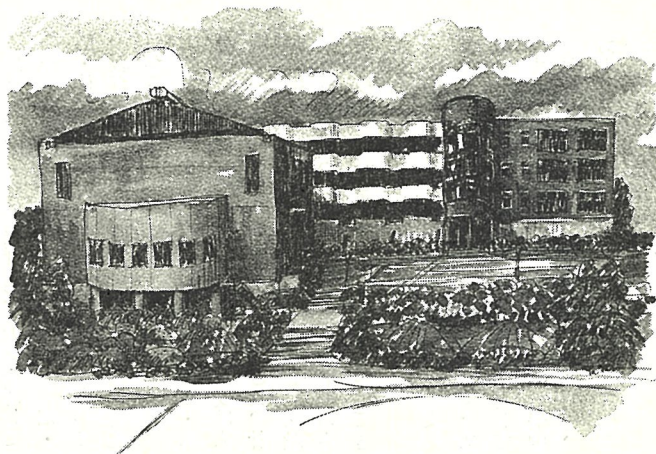
全学年 二七〇名
 男子 一四〇名
 女子 一三〇名
 国語子女 六〇名
 国内子女 三〇名
 男女共学
 中学校・高等学校六年の一貫教

◎学 寮

◎入学試験

◎開 校

昭和三十六年三月初旬
 昭和三十七年四月一日
 設置しない(通学可能なものに
 かぎる)



なお、「募集要項」などは、設置認可後直ちに発表します。
 (国際高等学校長)

アーモスト大学の 名誉学位授与式と卒業式

河野 仁 昭

外国での留学生生活をしたことがない私は、外国の大学の式典に臨む機会もなかった。



松山義則総長が受けられた名誉学位記

創設以来、ニューイングランドで学んだ外国人教師が多かった同志社の式典は、漠然とだが、その地のキリスト教主義の大学のそれをモデルにしているのだらうと考えていた。多分そうであらうと、今も思っている。

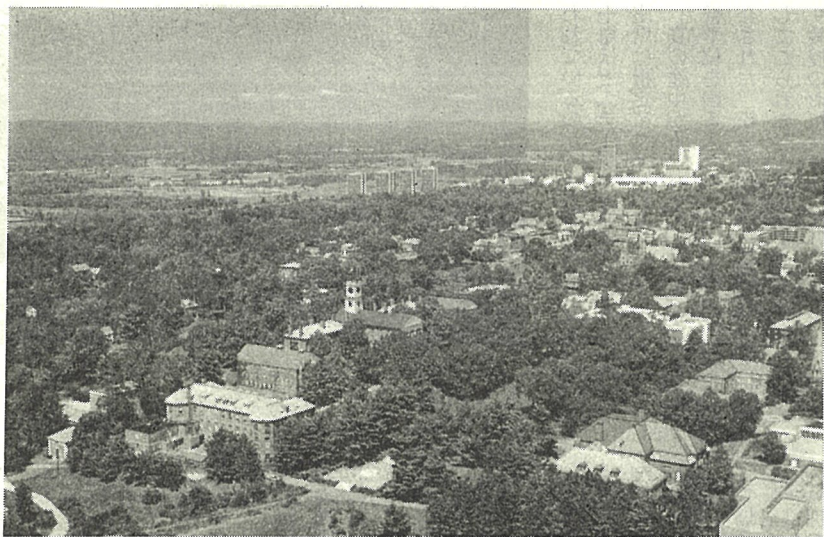
だが、今年（一九八七年）五月、松山義則総長に随行の機会をえてニューイングランド（カリフォルニア州の一部を含めて）の大学の式典をみたかぎりでは、私の想像とはかなり懸絶していた。おそらく、学んだ同志社はほぼ忠実に当初のかたちを守っているのだが、モデルのほうはさまがわりしたのである。

私が見たかぎり、卒業式場はすべて校庭であった。大正期から昭和初期にかけてだと思

われるが、同志社でも全学的な式典は運動場でおこなわれた。これは建物のキャンパシティの関係であったにちがいないまい。同志社の学生生徒総数が千名を超えたのは、大正二年度の一〇二五名からで、それまでの式場は同志社チャペルであった。やがて昭和七年二月に栄光館が竣工し、その年三月の第五十七回卒業式は、ファウラー・チャペルでおこなわれている。同年六月十七日にいとなまれた故新島八重の社葬もそうであった。

他大学のことは知らないが、アーモスト大学では、卒業式の前日（今年は五月二十三日土曜日であった）午前十時から卒業礼拝がおこなわれた。その場所はさすがにジョンソン・チャペルであった。私は、新島襄の肖像画を見上げる位置に掛けた。

この礼拝には、アーモスト大学の幹部の顔はみられなかった。来ていたとしても、堂内の後のほうに、会衆の一人としてであったと思う。会衆は卒業生の父母やOBらしい人たちが多かった。壇上には三人の牧師（だらうと思う）が座っていて、礼拝の役割をそれぞれが分担していた。特定の教派に偏らないようにするための配慮だと、あとで教えられた。



アーモスト大学キャンパス—中央にジョンソン・チャペル。その右手の木立の中が式場になる

先年、プリンストン大学を訪ねたとき、壮麗な教会堂の内部も見せていただいたが、案内して下さった方は、「スクール・チャーチに限り、特定の教派による礼拝はしません。ただし、各教派の学生たちが、ここで任意に礼拝を守るのは自由です」という意味のことをいわれた。そのことを、ジョンソン・チャペルに座っていて、ふと思い出した。プリンスントだけのことはなかったのである。

チャペルを出ると、キャンパスの一角に、立食形式の昼食会場が設けられていた。集まっているのは卒業生の父母が多いようであった。普段はひっそりとしてゐるにちがいないキャンパスが、祭りの前のようになやんでいる。卒業式場になる芝生の上には、整然と折り畳み式の椅子が配列されている。

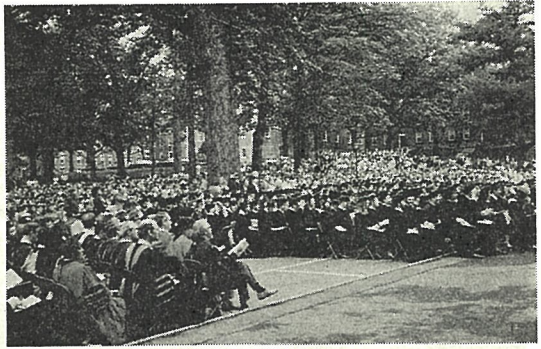
午後、オーテス・ケリー先生

のご案内で体育施設を見学したが、二棟の体育館のうち野球の練習ができる一棟の屋内には、雨天に備えて式場が用意されていた。野外を式場にするのは、建物のキャパシティとは無関係なのだ。

夕方六時半から、バウンシー総長邸でカクテルパーティーが催された。招待客は、松山総長をはじめ明日名譽学位を受ける人たち、校友会の幹部、理事、役職にある教職員などのようであった。総勢百名は下るまい。総長邸はこうした催しができるように、一階三室の間仕切りを広く開け放てるような構造になっていた。

アーモスト町で生涯をすごした詩人エミリー・ディキンソンを、永年研究しているというほっそりした初老の婦人からあいさつを受けた。ぜひその遺邸を見てお帰りなさいと、彼女はパーティーのざわめきでかき消されそうな声で教えてくれた。やさしい眼をしていた。

総長邸からキャンパス内の晩餐会場へ移るころ、雨になった。どこをどのように歩いたか、夜のキャンパスは闇に包まれていて、私にはまるで見当がつかない。普段はなにに使用



クラシックな装いの卒業式—右手は卒業生、左手前は教授たち

われているのか、食堂のような広間で、二十卓ほど大テーブルがしつらえられており、座席は指定になっていた。

宴の途中から、パウンシー総長が、明日名誉学位を贈る人たちを、一人ひとり懇切に紹介された。松山総長も、総長を日本から案内してこられたケリー教授も紹介された。ケリー教授のお祖父さんもお父さんも、それぞれ

アーモスト大学から名誉神学博士（D・D・）の学位を受けておられる。ケリー家はアーモストの名門ですね、とそばに居られたら申しあげたいところだが、そのメイン・テーブルはるか彼方だ。

翌朝、さいわい雨は上っていた。濡れた芝生の色がいつそう鮮やかだ。この地方の芝は、寒につよい品種らしく、冬枯れしない。

十時前、色とりどりのガウンとフードをつけた教授たちの列が会場へ進んできた。フードの色は、それが贈られた大学のカラーのようだ。アーモスト大学のそれは紫と白。パウンシー総長がつけておられたフードは、今年の三月、同志社から頂いたものだ、と松山総長に示されたという。

教授たちの列のあとに、黒いガウンをまとって角帽をかぶった卒業生の列がつづく。あちこちで歓声があがる。わが子や友人をその列の中に見出した声だ。カメラを構え、列にむかって突進する人たちもいる。カメラはたいてい日本製であった。

入場者の列は、椅子席を一周して所定の席についた。そのまわりを父母たちが半円状にとり囲む。式典の主催者や名誉学位を受ける

人たちの席は、図書館の正面玄関への石段を上ったところで、テラス状に一メートルほど芝生より高くなっている。席の左右に星条旗とアーモスト大学の校旗が飾られていた。

式は国家斉唱から始まる。ただし讃美歌も祈禱もない。いきなり、という感じで名誉学位の授与式になった。今年、アーモスト大学から名誉学位が贈られる人は十名。アルファベット順で、松山総長は八番目。パウンシー総長の紹介は懇切であった。下手にその概要を紹介するよりも、松山総長あてに送られてきた書状を、原文のまま掲げることにする（次頁）。パウンシー総長による紹介は、主としてこれを朗読されるかたちであった。

アーモスト大学から名誉学位を贈られた同志社人は、創立者の新島襄（名誉法学博士）、第七代総長原田助（名誉神学博士）、第十五代総長上野直藏（名誉文化博士）、そして松山第十六代総長（名誉法学博士—L・L・D）の四名。ほかに神田乃武ら四人の日本人がそれを受けている。

パウンシー総長から学位記が手渡され、デザインが松山総長にフードをつけ終わるまで、会場の拍手は鳴り止まなかった。胸が

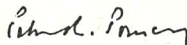
AMHERST COLLEGE
AMHERST • MASSACHUSETTS • 01002
THE BOARD OF TRUSTEES

CHANCELLOR YOSHINORI MATSUYAMA

Doctor of Laws

Raised in the schools of The Doshisha, our sister institution in Kyoto, Japan, you have now been associated with it for more than 50 years, and have risen to great eminence within it, having been elected three times its President, and now its Chancellor. From Joseph Hardy Neesima's energetic and visionary beginnings, your whole University now numbers some 30,000 students, in Kyoto itself and on the magnificent new campus you have helped to plan and build at Tanabe. You are a distinguished psychologist, with an international reputation for your work on anxiety, motivation and also human affection. And as an administrator, your understanding of human nature has allowed you to produce great results with a personal style of gentle persuasiveness and infinite courtesy, for which you are respected throughout Japan. We take this opportunity to thank you for all your strong efforts to maintain and foster the relationship between our two schools, and also for your incomparable hospitality to the faculty and students of the Associated Kyoto Program, and to a procession of traveling Amherst Presidents.

By virtue of the authority vested in me by the Board of Trustees of Amherst College, I confer upon you the Degree of Doctor of Laws, honoris causa, with all the rights and privileges pertaining thereto.



Peter R. Pouncey
President

May 24, 1987

松山総長に名誉学位の授与を伝えるバウンシー総長の citation

熱くなった。

贈呈式に続いて卒業式がはじまる。登壇した卒業生代表の女子学生は小柄で、演壇のマイクに届きかねているように見えた。すかさずパウンシー総長が席を立ててきて、四角な台のようなものを、長身を折り曲げるようにして彼女の足元へ置いた。会場がどよめいた。

そのどよめきにのせられたかのように、彼女のスピーチはユーモアとウィットに富んでいて、会場をわかせた。パウンシー総長のメッセージも、ユーモラスな部分を折りこんだものであった。とはいっても、私にそれが十分理解できたわけではない。その数日前に見学したアンドーヴァー・ニュートン神学校の卒業式でのスピーチもそうであった。他の人たちとともに笑え、拍手できるほど、言葉に即座に反応できたらどんなにいいか。

だが、英語教育者として著名な初期同志社の卒業生である村井知至でさえ、彼がアンドーヴァー神学校へ入学して最初に受けた授業について、次のように書いている。私などが、聴衆のなかで孤独に陥るのはあたりまえずぎることだ。嘆くのがどうかしている。

「新学期の第一時間目がプロフェッサー、

モーワという博士の受持で、先生は旧約聖書につき滔々一時間の講義をされたが、それを他の学生は皆忙がしくペンを走らして筆記するの、私はチットもその講義が聞取れないので、唯ペンを持ったばかりで、一字も筆記し得なかったことである。(中略)その時の失望は何とも言いようのない位であった」(『蛙の一生』)

総長のメッセージが終わると、卒業証書の授与である。ディーンが卒業生一人ひとりの名を呼び、呼ばれた卒業生は壇に上って総長から証書を受ける。証書は巻かれていて、アーモスト・カラーのリボンで結ばれていた。ギャラリーのあちこちで歓声があがり、拍手がおこる。わが子や仲間が証書を受けるとき、祝福をおくるのだ。

一人の女子卒業生は、ペットの大きな犬を連れて総長の前へ進みでた。盲導犬ではない。「ペット君もよく教室へ出たから、証書をあげたいところだ」と、ディーンは言った。

解放的だ、と私は思った。登壇者も教授たちも、そして卒業生たちも、その装いは極めてクラシックであり、式の進行も伝統にの

つつておこなわれる。にもかかわらず、野外の式場といい、スピーチといい、そして証書授与のやり方といい、すべて解放感にみちている。日本のそれは厳粛で、様式を重んじる。

伝統や気質のちがいもあることだから、いま性急に両者の是非をいうつもりはない。ただ、たとえば同志社大学で、あの田辺校地のラーネッド記念図書館の前にこうした式場をしつらえて、卒業式を一度やってみるのもわるくない、けっこうさまになりそうだと、ひそかに思った。

アーモストに在外研究中のU助教授や、この大学で数学を教えておられる大塚節治元総長のお孫さんなど、当地の日本人教員たちが、松山総長を祝福するために、宿舎のロビーで待ちかまえていた。

(本部社史資料室室長)

塞翁が馬

黒岩重吾

年で、高松塚の壁画が発見される五年前である。

それには現代小説と同じく私なりの原体験が深く関係している。

私は大阪住吉区の長池小学校を卒業した。だが旧制堺中学校（現三国ヶ丘高校）を受験し不合格となり、一年浪人してまた同校を受験して失敗した。浪人後の入学試験の成績には私なりの自信があり、何故不合格になったのか、長い間分からなかった。

作家になつてからも何となく納得が行かず、暇を見付けては調べてみた。その結果、私なりに得た結論は、当時の堺中学は非常に閉鎖的で、堺市の小学校の生徒しか取らない、ということだった。

大和川の北、大阪市の小学校の出身者が何を生意気に、大和川を越えて受験に来やがったのか、馬鹿奴、というのが当時の堺中学の方針だったらしい。

堺中学が地許じこ小学校の卒業生を優先的に合格させるというのは、当時は有名で小学校の教諭はそのことをよく知っていた筈だ、と話してくれた人もいた。どうやら私は小学校のクラス担任の先生によほど憎まれていたよう

古代史をテーマにして小説を書き始めるようになってからすでに十年以上の歳月が流れた。

私は現代小説を書いていた当時、私の小説は、それまでの波瀾万丈の人生体験と関係がある、といわれたりした。確かに私の異常な人生体験がなかったなら、数多い私の現代小説は生まれなかっただろう。

財産の総てをなくし、釜ヶ崎に住まなかったなら私の西成ものといわれる作品は生まれなかったし、証券会社や業界紙に勤めなければ経済界を扶けるような小説は書けなかった筈

である。

今でもそうだが、私が古代史小説を書き始めた頃、黒岩さんと古代史小説とどういう関係があるのですか？という質問をよく受けた。なかには高松塚の壁画が発見されてからの古代史ブームに便乗したのではないかとという皮肉な眼を向ける人もいたようだ。

確かに高松塚以来、古代遺跡の発掘はマスコミに大きく取り上げられるようになった。

私が古代史小説を書き始めるようになったのは昭和五十年だから高松塚以降だが、私が真剣に古代史を勉強し始めたのは昭和四十二

である。担任の先生は確か、四国か中国地方から大阪に来て二、三年ぐらいたったと記憶している。そういう情報にうかつたのかもしれない。だがそれでは受験生徒の多い六年生を受け持つ資格はないだろう。

私の受験成績が悪かったのではないかと、と疑う人が出て来るのは当然だが、そうではない傍証がある。

私が浪人中、父に通わされた岸の里の塾に、堺の小学校の卒業生で、私と同じく堺中学を受けたN君がいる。私は塾の模擬テストでかなり上位にいて彼より下だったことは一度もない。ところがN君は合格し、私は不合格だったのだ。受験が終った後、N君と話し合った際も彼はかなりミスをしていた。

矢張り私は余所者は入学させないという閉鎖性の犠牲者になったのだ。

受験当時のことをよく覚えているのは、不合格になって以来、無念さと虚無感で、東京に行こうと家出をたくらんだことがあったほど、少年の胸を傷つけられたからである。

だが私にとって人生は間違ひなく塞翁が馬であった。

私の父は真面目な電気技師で、私が私立中

学に入るのを許さず、奈良県の山間部にある奈良県立宇陀中学校を縁故を頼って探し出し、私を入学させたのである。

当時宇陀中学は、募集人員よりも応募者が少なかったので私は簡単な試験で入学出来た。

都会からただ一人、山間の中学の寮に放り込まれた私は苦しみや孤独感をいやすために山野を歩き廻った。

いうまでもなく宇陀中学校は、神武東征説話に出て来る菟田であり、宇陀万葉として有名な宇陀である。

私が入学した年、日中事変が勃発し、軍事訓練が強化され、私達は女寄峠を越えて桜井に行軍したり、出征兵士の家族の田畑の耕作を手伝ったりした。

ことに昭和十五年の皇紀紀元二千六百年を祝って神武天皇を祀る橿原神宮の大拡張工事には何度も駆り出された。少年ながら一体何故こんな重労働の作業をしなければならぬのか、という疑問を抱いたのを記憶している。同級生の中でこういう疑問を抱いたのは多分私一人であつただろう。それは大阪という大都会から山間の中学校に入らねばならな

かった運命に対する憤りも影響しているが、もっと重要なのは私に作家になる素質があったからである。絶えず自分も含めて周囲の事態に疑問を抱くのは作家の第一条件だと私は考えている。

当時は余り意識しなかったが、橿原神宮大拡張の勤勞奉仕に従事したことは、神武という天皇に対する疑惑を私に植えつけていたに違いない。

中学三年生の時、私は初瀬の長谷寺に下宿したり、磐余（桜井市）に下宿したが、古代史を勉強し始めるとその体験もおおいに役立った。

だが何といつても中学になって私を古代史の研究に駆り立てた原動力は橿原神宮である。ことに当時柔道六段だった校長は、私達に天照大神から神武までの系譜を覚えさせた。当時の中学生は、神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化と歴代の天皇名を暗記させられたが、神武以前の系譜まで教えられたのは私達ぐらいだろう。中年になり『古事記』『日本書紀』に比較的抵抗感がなく入れたのは中学生時代の原体験による。

もし私が宇陀中学に入っていなかったなら、私は古代史を勉強し、古代史小説という新分野を拓くことなど到底出来なかったであろう。

今一度述べる。人生は塞翁が馬であり、そのためには我々は与えられた運命を滋養しなければならぬ。

私は松山町（現在の大字陀町）に下宿していたが、その後長谷寺に下宿した。寺に下宿したのではなく初瀬町だが近鉄の駅名もはせでであり、寺の名前の方が一般的で地名になっていた。

私が下宿したのは初瀬川に面した二階家だったが、当時不良生徒であった私は、夕方になると下宿を出、白首の姐さんや女学生をからかったりした。仲間是他校の不良生徒だった。私は不良生徒になることで宇陀中学に入れた鬱憤を晴らすうとしていたのである。ただ私は作家になったぐらいだから多感だった。時にはやりきれないほどの孤独感に襲われることがある。そんな時、私を慰めてくれたのは神秘的で幽玄な長谷寺だった。

私はよく石の階段を走り本堂から山々を眺めた。長谷寺の山々にはまさしく霊山の気が

漂っていた。半時間も幽玄な雰囲気身をゆだねていると次第に気持ちが落ち着いて来るのである。その後数々の寺を知ったが、私を一時的にせよ浄化してくれたのは長谷寺だけだった。これは少年時代に私が長谷寺と接したせいかもしれない。

当時は由緒ある寺の歴史も知らなかったから、多分私は純粹な気持ちで霊山が持つ慈悲心に包まれることが出来たのであろう。

長谷寺の創立の時期は、矢張り長谷寺が大和から東国に通じる道に沿った山にあることを考慮に入れねばならない。そういう観点から天武朝時代、川原寺の僧道明が天皇の勅命をうけて長谷寺の前身である本長谷寺を建立したという伝えが正しいような気がする。

それに天武二年（六七三）に、天皇は伊勢神宮の齋王となる大来皇女を泊瀬齋宮に籠らせ、身を潔めさせている。齋宮の場所がよく分らないが長谷寺が霊山にあることを思うと、本長谷寺との関係も考えてみる必要があるようだ。

「こもりくの 泊瀬の山は 出で立ちの

よろしき山 走り出の よろしき山の

こもりくの 泊瀬の山は あやにうら麗し

あやにうら麗し」

『日本書紀』雄略六年条のこの歌は、古代人が泊瀬の山に抱いていた親愛の情と信仰心を見事に表わしている。

長谷寺の次に私が下宿したのは桜井市（古代の磐余）である。期間は短かったが、私は朝晩、多武峯や鳥見山、三輪山を眺めて暮した。この度、上之宮から聖徳太子が斑鳩に移るまで住んでいたと考えて良い上宮らしい遺跡が発掘された。私が下宿していた場所から四、五百米と離れていない。

「聖徳太子」を「文藝春秋社」から刊行した私としては感無量であった。

人生はまさしく塞翁が馬で、今の私は旧制堺中学に合格出来なかったことを心の底から喜んでいる。

（昭和二十二年旧制大学法学部卒業・作家）

K君のくれたパナリ焼

森 浩 一

1

一九六八年の春、同志社大学文学部文化学科へ一人の学生が入学した。「サミー、サミー」を連発するのも道理、沖縄県那覇市からきた学生だった。当時の沖縄県はアメリカの軍政下にあったため、京都での勉学は容易ではなかった。

K君は一年のときから私のいる考古学研究室に出入りし、各地の発掘にも参加するようになった。四年のころには、いっばしの考古学者の卵という雰囲気になってきたので、おそらくその方面の専門職につくであろうと私は期待していたし、沖縄のある大学からこそ

れとなく将来の打診があった。だがK君は、「考えることがあるので、卒業後は沖縄の経済のためつくします」という決意を固めた。そういうことで、卒業後しばらくの間、私との接触が薄れた。

2

一九八一年の秋、沖縄タイムス社などが「沖縄の古代文化」のシンポジウムを主催し、私も講師としてまねかれた。その機会を利用して、K君が活躍している石垣島を訪れてみようと思った。石垣空港につくと、すっかり遅くなったK君が待っていた。

3

実業界の人とはいえ、考古学の研究に進もうとしたほどだから、石垣島と竹富島の見学をうまく手配してくれ、八重山の古代文化の一端に接することができた。それと感心したのは、石垣島の経済が活気にあふれていることで、その当時、島といえは過疎という言葉をおもいうかべがちな自分の認識の甘さに気づいた。このことは、その後さまざまな島の果した歴史的役割をたどるうえで有難かった。

石垣島は夜も賑やかであった。私の好みを知っているK君は、島の魚をだす店でもてなしてくれた。酒がはいるほどに京都への郷愁を口にしはじめたが、ふと、八重山の典型的な土器であるパナリ焼を手にいれて大学の研究室へ寄贈します」と提案した。

パナリ焼とは、あとで述べるように八重山産の素焼の土器であって、沖縄の地域文化を説明する好個の資料であるが、遺品はたいへん少ない。それに縄文土器や弥生式土器のように発掘で出土するのではなく、農家で長年にわたって使われる形で偶然に伝世し、した

がつてごく稀に世に出る古器物なのである。私はK君の提案も酒の勢いで発言ぐらいうけとり、すっかり忘れてしまった。

4

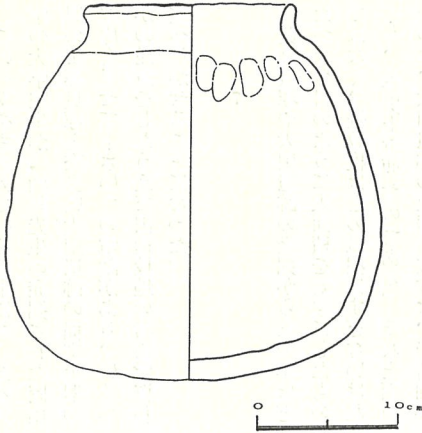
今年の四月、K君から研究室に電話がはいった。「明日京都へうかがいます」と急なことで。

「明日は奈良で会議があるので、京都に帰るのは夜になります。別の日の方がゆっくりしてもらえうが」というと、その先をさえぎ



るように、約束してあったバナリ焼を手に入れたのです。早くおとどけしようと、飛行機の切符を手に入れました。

「では私が奈良で会議にでている間、田辺校地の考古学資料室へ行って下さい。そこへ陳列するので、どんな施設か見ておいて下さい。ついでに校地内もよく見ておいて下さい。あなたが発掘に参加した天神山の弥生遺跡も校地内に保存してあります」と電話を切った。



5

ここでK君の寄贈してくれたバナリ焼を陳列する考古学資料室について、現状とか未来像を述べておこう。『同志社時報』八〇号に「田辺開学と二十一世紀への展望」という一文を書いたことがある。そのなかで文化財という戦後流行した言葉にたいして、まだこなれてはいないが学術財という言葉を使った。学術財は大学（もちろん所属の大学人）が研究活動の過程で生みだした財であり、東京大学では一例をあげると明治初年のエドワード・モースの大森貝塚の発掘過程で生みだされた学術財をおさめるため総合資料館がつけられた。具体的にいえば土器・石器などの遺物だけでなく、その時のノート・図面などはもとより、土地所有者との発掘交渉の書類なども学術財として保存・活用されている。比喩として例にだすのだが、セザンヌの絵画やロダンの彫刻は、予算がつけば購入することができる。今日日本各地で、それぞれの地域文化とは縁があるように思えない西洋美術品を飾る美術館が急造されているのは、おおむね公金で購入したものである。だが学

術財は、大学にもし将来じゅうんたくな資金ができたとしても、購入はできない。つまり学術財は、その大学（大学人）の創造的で実践的な研究の積みかさねから生みだされるものであって、おそらく二十一世紀の大学は、各大学の歴史のあかしとして学術財を保存・陳列する資料館が図書館とともに研究・教育の両輪になるであろう。つまりここでいう大学の歴史とは、たんに何年から発足したとする経過の記録だけではなく、その大学に所属する人たちが何を知的に創造したかの集積なのである。

6

同志社大学にある学術財は、私の前任者であった故酒詰伸男教授の關係された発掘資料だけでもおびただしい。土器や石器もさることながら、調査ノート、発掘報告書、原稿・図面なども貴重な学術財である。先生が亡くなられて二十年余りたったが、それでも時折、発掘当時の図面を見せてほしい、というような申込みがある。上質とはいえない紙に鉛筆で描いただけの図面だが、それなりの学術価値をもっている。

この一文をまとめている最中にも、ある大学の大学院生が、酒詰先生の発掘された岡山県の黄島貝塚と奈良県大川遺跡の縄文土器の破片を見せて下さい、の電話があり、いくつかの注意をしたうえで田辺校地の考古学資料室へ行かせることになった。

7

黄島貝塚や大川遺跡の発掘から三十年ほどたつ。今日のように大面積を対象にしたものではなく、量数枚ほどの試掘にすぎないけれども、学史上重要なのである。それと面白いのは、大川遺跡の土器の破片は、当時細かく研究され発掘報告書も刊行され、その意味では学界の共有知識のはずなのに、若い研究者が新しい視点で見直すと次々に新事実が気付かれ、論文になる。これは最初の研究が不十分であり研究者の力不足によるのではなく、実は学問のもつ宿命なのである。一つの研究は次の世代によってのりこえられるべきものである。

学術財は、このようにそのもっている価値を一人の、あるいは一回の研究で失いつくすのではなく、それが保存されているかぎり、

思いがけない価値がはじきだされるのである。

学術財という新しい観点にたつても、私は同志社大学は歴史の古い大学と思う。新島先生も、数点の縄文時代の石鏃をのこしておられるほどだし、先生が購入の手配をされた Sir John Lubbock の名著 *Pre-Historic Times* にしても、国立奈良文化財研究所の佐原真さんが最近お書きになった「ラボック・トムゼン・シーボルト・モンテリウス詣で」によると、初版本は日本になく、二版が東京大学に二冊、三版がなく、四版は同志社大学本だと指摘されている。

この三冊のほか最近イギリスから古本として購入したものはあるが、一八七八年の刊行に近い時点で日本に入ったのは、佐原論文では東京大学に次ぐことである。こうなると、たんに一冊の図書ではなく、すばらしい学術財であり、同志社大学の歴史の証人なのである。

私は、これらの学術財を整理・保管し、さらに活用するための常設の組織と施設を一日も早く作りたい。本務のかたわら学内外の人へサービスしているが、それではさまざまに

無理があるし、尨大な資料を充分に生かすことはできない。

8

話は、ずい分廻り道をした。ここでK君の寄贈してくれたパナリ焼について述べよう。

パナリとは、離れの意味で、石垣島の西方約二十キロにある新城島のことである。大きな地図にはでていないほどの小島だが、ここでカタツムリの殻を粉にしたものを陶土にまぜた珍しい焼物が生産された。器形や色調はまるで弥生式土器や古墳時代の土師器のようであるが、年代は近世と考えられている。カタツムリの殻といえは、脆弱という印象がある。だがそれはまるで逆で、きわめて堅緻に焼上っていて、ずっしりと重い。先に述べたことではあるが、農家に長期間伝世することのあるのは、その珍しさによるのではなく、その堅牢さにもよっているのである。

最近の日本文化研究では、地域史の面白さ、地域文化の多様さに目が向けられてきた。江戸時代の焼物を例にとっても、瀬戸・常滑・信楽・備前・京都・伊万里などは確かに窯業の盛んな土地だったが、それだけではなく、

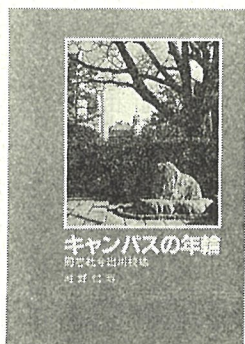
どの府県をとってもいくつかの窯が操業されていて、土地の名をつけた三田焼（兵庫）や小峯焼（宮崎）などの名で知られていた。おそらく十八〜十九世紀において、地域ごとに窯業生産がおこなわれていたという意味では、世界的に例がないのではなからうか。そういう意味でパナリ焼は、考古資料であるとともに、日本の地域史の好資料である。K君、つまり金城定之君の寄贈した土器は、常設展示してあるので、機会があれば実物をご覧下さい。

付記 考古学資料室は、授業期間の月曜、金曜にオープンしています。電話は五―七二五五

（大学文学部教授）

『キャンパスの年輪
―同志社今出川校地―』

改訂版



今出川校地の一一〇年の歴史を、多数の美しい写真を用いて、目に見えるように描いた軽妙なタッチの同志社史。

著者・河野仁昭 写真・秋山真邦、宇佐美宏ほか同志社大学出版部刊。B5判、二二四ページ。定価一五〇〇円。

取扱いは同志社収益事業課
電話（〇七五）

二五―三〇三七、三〇三八

矯正余話

第一話 二律反背

「いたい検査は入念にするように」という指示が出た。浪速少年院に勤務していた頃であるから二十年も前のことである。重病人があったとは聞いていないし、何事ならんと思つていると、収容している少年を、外から居室に戻すときは、衣服と身体の検査を疎かにするなということであった。

信頼しながら疑うという矛盾を苦もなげにこなしている教官がいた。Yさんという三十半ばの偉丈夫であったが、「それ、もつとしっかり腕を上げんか、何ちゅう格好か」などと大声で毒舌を吐きながら、少年の腹をさすり、ずぼんをぼんぼんと叩くが、少年達から

十河 一

は結構慕われている。検査をEric Berneのいう touch stroke (交流分析の術語で身体接触による心の働きかけ) に変えて、心の交流の道具にしてしまっている。Y教官の心の底に流れるものを、少年達は鋭く見抜いていた。

第二話 有馬四郎助 (一)

昭和五十一年東海地震説が公にされて一年経過したが、矯正施設では災害対策を強化している。危機場面で拘禁されている者の心理状態を調べていた折、三吉明著の「有馬四郎助」を読んで、有馬が同志社と関係の深いことを知った。有馬は薩摩藩士であるが、明

治一九年二二歳の時、今という刑務官として北海道に渡っている。釧路集治監の看守長、空知集治監の第二課長、網走分監の初代分監長として開拓期の北海道行刑にたずさわった。明治一四年の監獄則によると、集治監は、徒刑(有期たる)と無期たるを問わず、島地に発遣して定役に服せしめ、流刑(有期も無期も島地の獄に幽閉し定役に服せしめない)の収容施設であり、明治初期であるから、佐賀の乱、神風連の乱等の終身国事犯や重罪者が多かった。有馬は囚人一揆を鎮圧したり、護送中の集団逃走者と野外戦をしたりしている武断派の司獄官であった。

明治二十四年同志社出身の留岡幸助も空知集治監の教誨師として北海道に渡っている。留岡は、有馬がキリスト教に大反対だと忠告を受けている。しかし、有馬は最北の地で採炭、道路開鑿の厳しい作業をする囚徒に希望を与えるキリスト教誨をみて心を開いていったようである。有馬は、後にその留岡から洗礼を受けている。明治三十一年有馬が巢鴨監獄の典獄(刑務所長)の時、巢鴨教誨師事件を起している。これは、教誨制度の刷新を試み、留岡を巢鴨監獄の教誨師に迎へ、本願寺

の反撥を受けたことに端を発している。有馬は市ヶ谷監獄に転ぜられ、留岡は、とどまっていたが警察監獄学校（監獄科は現在の矯正研修所の前身）の創設を期に教授に迎へられ事件は納まったとある。

有馬に影響を与えたのは留岡だけではない。明治二五年同志社を卒業し、釧路集治監に勤めた大塚素^{もと}がいる。彼は勤務の後、極寒の夜中、聖書に註をつけた手紙を当時網走分監長であった有馬に送り続けたとある。明治二九年のキリスト教教師連袂辞任まで、北海道の五つの集治監全部にキリスト教教師師一一名が配属され、うち一〇名が同志社出身であった。後に総長に就任された牧野虎次もその一人である。

第三話 有馬四郎助（二）

有馬が小菅刑務所長をしていた大正一二年関東大震災があり、煉瓦造りの建物も外壁も倒壊した。そこでは一二九五名を収容していたが、彼らには有馬の人情豊かな処遇に恩返しするのはこの時と、互に戒め職員の指示によく従い一名の逃走者もなかった。有馬は解放の措置をとることなく秩序を保ち、住民に不

安を与えなかった。解放は監獄法第二二条にあるが、解放の歴史は、明暦の大火（一六五七）に逆る。囚獄奉行出石夢^{ゆめ}刀は、火が小伝馬町の牢屋敷に迫った時「焼死せしめんは不惑の至り」と囚人を解き放った。囚人みな慈心を感じ戻ってきた明暦大火の切り放ちである。この様な処置がとれたのは、囚人をも慈しむ心が世間にも監獄行政にたずさわる者の間にもあったためであろう。

石川島人足寄場^{あしよば}（敵刑・入墨刑に処せられ居住地のない者等を収容し教育、授産をした）でも、安政の大江戸津波の時、寄場奉行が全員避難させようとしたところ七十余人は残って防禦作業を手伝ったという。

危急の場合に、職員と被収容者の信頼関係が強ければ、混乱を防ぎ、建設的行動すら生ずる。吾が国の矯正施設が、武装をせず秩序を維持しているのを見て、諸外国の研究者は感心するが、根底にこのような人間関係があるからと思う。しかし、職員に対する暴行事件もある。時代の移り変りに応じて、義理人情から、人間科学に拠をもつ処遇方法を発展させていかなければならない。

参考文献「有馬四郎助・三吉明著・弘文館」

「日本行刑史・瀧川政次郎著・青蛙房」「北海道行刑史・重松一義著・図譜出版」

第四話 検査

書前と夕方、矯正施設の所長室に行くとき、炊事担当職員が検査箱を持って来るのによく出合わす。検査は、施設長、医務課長ほか、決められた職員が、味付、盛付、衛生等に気を配って行う。収容されている者にとって、食事は栄養をとるほか、単調な生活の中の寛ぎの時間でもある。家庭でもインスタント食品が多くなっているが、ここでは、けんちん汁、いもの煮ころがし、などおふくろの味が出る。一方、朝、ヨーグルト、マーマレード、チーズ、マーガリン。書、鯖のムニエル、タルタルソース、ポテト、青菜ソテー。夜、ハンバーガー、スパゲティ、サラダ、ひじき炒煮とカナカナの料理が並ぶこともある。嗜好調査をして、若者の味覚に合うような工夫も凝らしている。副食の一日標準量九〇〇カロリー、蛋白質、脂質、カルシウム、ビタミンも、それぞれ標準量を上まわるように、栄養士が献立を作り、調理士の指導のもとに料理される。冬は温食給与をし、夏の冷

麵は冷やされて配食される。他に食糧品の購入の係がいる。副食三食で三〇一円二〇銭の範囲で納まるように新鮮なものを仕入れなければならぬ。検査箱の中は、その集積したものである。ちなみに少年鑑別所の米麦混合率は、米八麦二である。検査は、徳川時代から、江戸町奉行の牢屋見廻り力が毎食囚食を検査したとある。自分の選択が制限されている人達への配慮は、どの時代でも大切である。

第五話 女子犯罪

売春防止法が昭和三十一年に施行され、風営法が昭和五九年に改正されたが、巧みに新しい方法を編み出してゆく。テレクラ *tea phon club* に電話する少女などは遊び半分で、男はまず電話の会話で選択され、一次にパスして待ち合せ場所に行っても、遠くから品定めされ、二次にパスしてデイトをして、高級レストランへ行こうと懷具合を審査される仕組みになっているから、遊郭に身売りされていた時代とは様変わりしているが、女性が人としての尊厳を失い、自己実現の妨げになっていることに違いはない。

法務省は毎年犯罪白書を出しているが、昭和六〇年版から女性犯罪の章を、女子犯罪と変えている。私はかねがね男性犯罪の研究がなくて、何故、女性犯罪の研究があるのかと思っていた。なかには女性の犯罪者は知能の低い者が多いというものもあるし、嫉妬深いという特徴をあげているものもある。嫉妬深い男性もいるのである。少くとも犯罪のメカニズムを理解するうえで、犯罪行為をした者が女性であつただけのものと、女の生理・心理にもとづく犯罪とは区別する必要がある。

第六話 暴走族

京都少年鑑別所に勤務していた昭和五五年頃、よく暴走族が来た。頭、親衛隊長、特攻隊長（赤信号の交差点へ突込んでいって、横の流れを止める）等組織が出来ており、仲間が収容されると呼びかけに来るのである。深夜、明け方と時間かまわず、爆音を立て、ミユウジックホーンを鳴らし、爆竹を投げ込む。その都度職員が出動するが、逃げ足が早い。御近所にも迷惑であるが、逃げた方向や、車の色などを教へてくれて、鑑別所があるからだという苦情は出なかったことに、今

もって感謝している。

昭和六二年から東京少年鑑別所に勤務しているが、ここにもやってくる。それだけでも迷惑であるが、御近所の邸宅の壁に「板橋龍神会」「新宿統偵」「練馬極龍会」などと落書した。その御主人から鑑別所に苦情の申入れがある。御主人に付添って警察に行つて、被害届を出すよう勧めたり、警察に捜査を頼んだりした。御主人の、気持は一応納まったものの、あてにはしておられないようだった。

ところが二カ月程して、御主人が鑑別所に来て「落書をした少年達と保護者が謝りに来ました。落書を消す作業が始まりました。鑑別所が本気になって、一語に警察へ連れて行つてくれたので連絡に来ました。警察も良く探し出すものですね。顔を見ると可愛想になつたので軽い処分ですませてやつてほしいと警察にお願いしてきました」ということであつた。御近所の方の笑顔や、優しい気持ちに接してほつとする。あの壁の前を通る時も、負担を感じなくてすむようになった。

（昭和二十八年大学文学部卒業・東京少年鑑別所所長

本業と趣味の接点

金谷良三

若輩の頃、私は時々、趣味を尋ねられた。そのたびに私は返事に困った。何故ならば、私の本業が、大学以前から、歌うことだったから。即ち、歌うことは、一般の方々にとって

はしばしば、趣味や楽しみに属する行為だから、それを本業とする我々が、はたしてどんな趣味を持っているものかという疑問をお持ちになったのだろうと思う。

歌うことが本業になる以前は、私にとってもそれが、しかも大きな趣味の一つだったし、毎日のようにそれを楽しんでいた。

今更、歌が趣味であるとはとても言えない立場にあったし、むしろ自分自身にも、すでに趣味の域を越え、本業なのだと言い聞かせてさえいた。従って答えに窮し、その間、自

分の本当の趣味ははたして何なのだろうかと考えてしまったのだ。

思い返してみるとこんな事があった。私が東京芸大へ入って間もなくの六月頃と記憶する。高校の先輩が某大学・グリーククラブに属しており、彼から、東京六大学の男声合唱団が一堂に会するコンサートのを買わされた(?)。その時は文字通り買わされたと思った。

当日の足取はあまり軽くもなかったが、会場の青山・日本青年館へ行き、聞き始めた。各大学のエール交換に始まり、引き続き、次々舞台に現れ、得意な曲を歌い進む各大学の男声合唱を聞いていたうちに、彼らが、如何に音楽を愛し、合唱を楽しみ、人のつながりを大切にしているかを痛いほど見せつけ、聞か

された。同時に競い合う如くに。又、客席の人々も、舞台の上と同様の熱気を呈しているのである。聴衆の中には当然、演奏者達と何らかのつながり——OBであったり、身内であったり、恋人達であったり——を持った人がほとんどだったのだろうが、舞台上と客席が共に燃えているといってもよいほどの雰囲気だった。気がつくとも私も、それら千余の人と共に酔ってしまっていた。

終演後、会場を出て神宮外苑を歩くうちに酔いが感激に変わり、数日うちには、東京芸大へ入ったつい二ヶ月前の感激や喜び以上の興奮をさえ覚えたのである。そして真剣に、芸大を退いて先輩のいる某大に入り直し、グリーククラブに所属し、アマチュアとして音楽を楽しむという考えが日々ふくらみゆれながら、ももんとした幾十日かを過ごした記憶が、今でもよみがえって来るのである。

それまでも、いろいろな形の、数々の名演奏に接し、感動し、ため息し、時には涙したこともあった。だからこそ、音楽・声楽の道を選んだ自分だったはずなのに、当夜の感激と興奮は未だ新しい。そしてそれ自体の記憶や、その後巡り会った数多くのアマチュアの

演奏が、私の頭の中で長い年月、醸され、音楽の演奏におけるプロとアマチュアの垣根を低くしてきた。私は、お互い専門家同志の交流が中心であると同時に、アマチュアの人達とのおつき合いを、自分の音楽活動の重要な接点と位置付けてきたのである。

音楽を全体から眺めた場合、当然のことながら、玄人の領域と素人のそれとは、おのずから隔りがあり、差異もある。学問としての音楽や、演奏という形をとった時の音楽にも、素人にはどうしても究めることのできない聖域が存在する。しかし、例えば、自然科学や人文科学等の、いわゆる一般の学問に比べると、音楽の世界は、素人にも近寄り得る学問、あるいは専門領域である。しかも演奏という面において、加えて、声楽というジャンルにあつては、重なり合う面が大変広いといえよう。従つて、そこに身を置く我我声楽家、両者の世界を分割してもよいものだろうか、はたまた、分割して活動や研究が可能なのだろうか。たとえ可能であり、許されたとしても、私の考えではむしろ、互の立場を認識し合いながら共存し、演奏にあつては時に、共演することが必要であると断言するも

のである。この事は今更言わずとも、日常的に現存し、定着してはいる。

その一つの良い例が、我国における合唱活動の現状である。合唱の世界にもおのずと、プロフェッショナルとアマチュアが現存するが、中でも、アマチュア合唱団の演奏レベルの高さには目を見張るものがある。毎年行われる全国レベルの合唱コンクールを一つの頂点として、各地方の合唱祭や交歓会、各大学合唱団の定期演奏会等々、中には大変充実したのもあり、高い評価を得ており、近年はその名声が外国にまで及び、招待を受けたり自ら出かけたりの盛況である。一方、プロの合唱団（数は少い）も独自の演奏活動を日夜続けており、中には、他の追隨を許さぬハイレベルな演奏活動を推進している。専門の声楽家達で構成されているプロ合唱団と、アマチュア合唱団が、日常的には対等の演奏活動ができるわけがないし、メンバー一人一人の力量にも、一方、物理的にも制約があつて、並べて比較することは不可能であるがあえて比べるとすれば、一つの作品における精神的消化度及び表現度にはプロのそれよりはるかに深いものがしばしば見受けられる。

合唱の世界ほどではないが、声楽を中心にした演奏面においては、玄人が素人との心の交流を計らねばならないと、私は確信する。プロの一員である私に足りないものは多いが、演奏における精神性の消化度とその表現度は、アマチュア人から学びとらねばならない最重要事項かと、意を注いでいる昨今である。彼らには、溢れんばかりの音楽の心が宿っているからである。

そんな方達から時に、「好きな歌が本職とはうらやましい……」と言われることもあつた。言われる通り私自身、職業として歌つてはいても、その事を楽しんでる気持もあつたし喜びでもあつた。とはいえ若い頃はその言葉に強く反発し「職業になるとこれほど厳しいものはない……」と言つたりもし、今も尚、その考えと現実とは変わらない。しかし思うに、一般の方々が趣味として楽しんでおられる「歌うこと」が私の本業になったとはいへ、趣味として歌うことの一面を兼ね備えていなくてはならないのではないかと、中年になつた頃に考えるようになった。趣味として歌うことの一面とはどういうことかと自問するに、次の様な考えが浮かんできた。

趣味として歌うことを楽しんでおられる一般の方々にとって、歌を歌うということは文字通り最高の楽しみであり喜びのはずである。それが、どんな種類の、どんな内容の、どんな形態の歌や演奏であつても、それぞれにお楽しみでありお喜びである。その方々のその時のお姿を、「本職になれば厳しいものの……」と言つた私でさえ、時にはほほえましく、時にはうらやましく、時には楽しくお見受けし拝聴するのである。カラオケで歌つてゐる彼らの顔……、合唱で歌つてゐる彼女達の表情……、聖火を囲んで歌つてゐる若者達の姿……等々。即ち、歌を歌つておられる様子を聞いたり、見る立場になつた時、歌つてゐる人々の表情や、姿、形、心等を総合したものが、聞き、見る人々への感情移入になり共感を覚え、聴衆であることの歓びと感激を味わうことができるのである。その場においては、歌う人も聞く人も、はたまた素人や玄人という境界もおのずと取り除かれ、音楽による一体感を共に味わひ得るのである。

もとより舞台の上で、演奏者として歌つてゐる我々は聴衆に対し、楽曲の内容とその素晴らしさを正確に伝え、良い演奏を提供

し、その演奏会全体の雰囲気を作り上げ、そのことによって聴衆に喜んでもらひ、語りつつ帰途につき次の機会を待ち望んでもらえるのが、使命である。ただ、この考え方、表現、文章はいかにも硬すぎるので、そこに趣味として先述の「趣味として歌うことの一画」を加えねばならないことに気付いたのである。どんなに格調高い演奏であつても、学術的に立派な発表であつても、はたまた、一級の評論家がどんな賛辞を述べようとも、それらが一人よがりであつてはならない。願わくば同時に、一般の聴衆にも大きな共感を与え得る演奏であることも不可欠な条件なのである。そのためには、演奏家・声楽家が、アマチュアが楽しく愉快に歌つてゐる様子——表情、姿、相好——の全てを兼ね備える必要があり、それが即、全聴衆と感動を分かち合える演奏のありかたになるのである。一つの演奏会が、演奏者と聴衆の共感によって成功する、と言われる一因は、そこにある。それらの考えから私は、プロの一員であると共に、アマチュア精神に共感し、共通語を持ち得る一人でありたいと常々思い、その方向に自分を向けようとしてゐる。

以上の事は決して、専門家やプロが、一般の人々に迎合しようとするものではなく、むしろ、聴衆の持つ、演奏に対する潜在的な期待に応える使命なのである。教育心理学で、「子供と同じ目の高さで語り合う」必要性を教わつたことがある。演奏における専門家と一般聴衆の関係も、その説と一脈通じるものがあると思う。ただ、そのいずれの場合でも、相手と同じ目の高さになるには身をかがめねばならず、そして立ち上つた時には、より高い目線を持たねばならないことも常に心に留めておきたい。即ち、専門家としての知識と技術と経験は、より広く、より確かで、より高いものでなくてはならない、と。

近年とみに、多くのアマチュアの方々とおつき合ひが増え、その方々から何と多くの示唆を受け、多くの事を学び得たことか。プロの片隅で、専門家の一員としてゐる歓びは大きく、倅せに思うと同時に、音楽学生や後輩達も含めたアマチュアの人々との交際も、それに勝るともおとらぬものとし、受けたご恩に感謝する昨今である。

そしてこの感謝を、わが師と先輩方にも。

(女子大学教授)